

## 蕪村俳諧私解：「欠かけて」の巻

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 真弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4634">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4634</a>

## 蕪村俳諧私解

### ―「欠く〜て」の巻―

石川真弘

はじめに

遠く西行・宗祇の精神を慕い、冷え寂びの境地を庶幾して思索的姿勢を窺わせる芭蕉の作品に対し、蕪村の作品は、句作りにおいて趣向の面白さを楽しみ、屢々物語的世界を展開させ、虚に遊ぶ姿勢が見られると評されている。しかし今日蕪村作品の句解に当たり、そうした評を考慮せず、ややもすると芭蕉作品と同一視点で理解する傾向が見られる。言葉の照応や詩的情趣をいたずらに指摘するばかりで、肝心の蕪村俳諧特有の趣向の面白さを見過ごしてしまっているように思われる。そこで明和九年（一七七二）に刊行された『其雪影』所収の蕪村発句の歌仙「欠く〜て」の巻を取り上げ、蕪村流の趣向に注意しつつ私解を試み、識者のご教示を仰ぎたく思う。以下私解を記す。

発句 欠く〜て月もなく成夜寒哉

蕪村

季語は、「月」「夜寒」で、秋である。五句日の定座の月が引上げられている。『御傘』に「夜さむ秋也。夜さむき、寒き夜、よを寒み、夜のさむき、皆冬也。」とある。

「欠く〜て」とは、一晚ごとに月が次第に欠けて行くという意味で、時間的経過、季節の移りを捉えた表現である。欠けた月を詠むことはこれまでもあったが、季節の流れ、日々の季節の変化として捉えたところは、蕪村の新しい視点であろう。また、「月も」の「も」の働きに注意すべきである。何もかもが晩秋に向かい、仲秋の頃には激しく盛んに鳴き競っていた虫の音も、日々弱々しくなり、今はほとんど聞かれなくなり、月もすっかり姿を消した。そういう秋の深まる様子を、句の背景において鑑賞すべきであろう。「夜寒」は、一日一日冷気が増し、今日のこの夜いよいよ夜寒になったと解することが出来る。時間的経過、動的構成表現が巧みである。

なお本連句を納めた俳書『其雪影』(明和九年成)は、蕪村の高弟

几重の父凡圭の十三回忌追善集であり、この句には、「凡圭を失い、日々寂しい思いが募るばかりである。」という凡圭に対する蕪村の追善の想いが詠み込まれている。

欠く／＼て月もなく成夜寒哉

脇 秋しづかさに謡一番

几重

季語は、「秋」である。「しづかさ」は、雅語的気味の「しづけさ」に対し、俗語的響きがある。「しづかさに」は、「静かさのために」の意ではなく、静かさに誘われて謡を楽しむというのである。「しづかさ」は、前句の「月もなく成」に応じた確かな表現であり、物音一つしない秋の深まって行く様子を一層はつきりと描写した言葉として、その働きは大きい。「秋わびしさに」では、通俗平板に落ちて意味が浅薄になる。「謡」は、人柄、人品を暗示する。それなりの嗜みのある人であり、風雅を解する古い武者などを思わせる。「一番」という表現も大切で、単なる数を示した言葉ではない。い加減な気分で謡い初めて中途半端に終るのでなく、一番きちんと謡い切り、その後はまた静かさの中に身を置くことだといっているのである。月は日に日に欠け、今夜はすっかり姿を消し、秋も深まって夜気が冷たく感じられるようになり、虫の音もほとんど聞かれず、辺りは静かさに包まれている。その静かさに誘われて謡を一番楽しむことである。

秋しづかさに謡一番

初オ三 やへ葎醪醪売も見かぎりて

竹護

季語は、「醪醪」で秋である。前句に、詩酒を愛し、貧しさを

意に介さない文人的人物を見定めての吟である。支払うべき金がないためいずれの行商人も来なくなり、今は一番楽しみにしていたどぶろく売りにさえ見限られてしまった。「も」は、何々にさえ、何々にまでもという意である。貧故に支払いが滞り、行商人たちは全く来なくなり、唯一楽しみにしていたどぶろく売りにさえ今は見限られる始末である。「やへ葎」は、草に埋もれ壊れ放題で荒れ果てた住居であり、貧なる生活を一向に気に留めないばかりかむしろそうした生活を楽しもうという人の様子が忍ばれる。貧乏生活のこの家を今は訪れる人はなく、一人酒を楽しもうとしてもどぶろく売りにまで見限られて酒はなく、秋の静かさに誘われて謡一番を語って、我が身を慰めるより仕方ないのである。

なお、占歌「八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり」〔拾遺集卷三〕による句作趣向であろう。

やへ葎醪醪売も見かぎりて

初オ四 遠山高く遠山低し

村

雑の句である。エンザン・トオヤマと音・訓を使い分けして読む表記の記号を付し、空間的絵画的構図の表現を試みている。先ず初めの遠山を「えんざん」と読ませ、中国の墨絵に見られる岬岬たる山を表わし、次の遠山を「とおやま」と訓じ、日本的「遠山霞」と言うべき平坦な山並みを思わせ、句のリズム上の効果をも配慮している。音・訓の読みの韻律的響きを利かせた句作趣向であり、蕪村の表現手法は多岐に互り、彼の詩才の豊かさを窺わせる。前句に、人の訪れは全くなく、どぶろく売りにも見限られるほどの、山また

山が連なる辺境の荒涼たる土地柄を見定めての付け句である。八重葎の家から眺められる景で、その宿の主は、敢えて人里を離れ、孤高に身を置き、絵や漢詩などを嗜む文人であろう。

遠山高く遠山低し

初オ五 朝風に水主も烏帽子を着たりけり

葎

雑。水主は船頭のこと。烏帽子は、王朝の風俗を思わせる。朝風に合わせて船出をする折りの様子であろう。旅の船出である。『土佐日記』二月五日の条に「朝北のいでこぬさきに、綱手はやひけ。」などとあり、その俤げであろう。貴人の船出の旅立ちの儀式であるから、船客はもとより船頭までも烏帽子を付けて正装し、改まった気持ちで威儀を正して船出するのである。「水主も」は船頭までもがの意で、「も」に注意して解すべきである。好天で遙か遠くまで晴れ渡り、波も穏やかである。船の上から遠くの山々が眺められ、船出に絶好の日和であり、旅の興趣が一段と増す。蕪村一派が志向した王朝物語の世界である。

朝風に水主も烏帽子を着たりけり

初オ六 日記も扇に書てことたる

護

雑。「ことたる」とは、ことを済ませるの意で、句は、旅の途中故何事も簡便に済ませ、日記を付けるにも充分な紙の備えもなく、間に合わせに一先ず扇に日記を記して置くというのである。「扇」は前句の「烏帽子」に応じ、その人の品格が察せられ、古雅な趣が漂う。しかし句頭の「日記」は、直ちに「土佐日記」への連想を誘い、変化に乏しく付き過ぎの感は免れず、やや説明に終り、詩趣に

欠ける嫌いがある。竹護には、古典や故事などに依る作品が少なくない。例えば「舟たえて宿とるのみの二日月 几葎」という句に「紀行の模様一歩一変 嵐山(竹護)」と付けるなど、『此ほとり』の連句にもその傾向を窺うことができる。

日記も扇に書てことたる

初ウ一 究竟のこのした陰よ藤若葉

村

季語は、「藤若葉」で夏である。「究竟」とは、詠え向きという意である。余り句には用いない語で、蕪村の漢語趣味を窺わせる。船旅から陸地の旅人に転じ、詠え向きの木陰で体を休め、手早くその日の出来事を扇に記すのである。早く扇を用いて汗ばんだ体を扇ぎたいために手早く認めるのである。前句の「ことたる」を巧みに引き込んだ付け句である。「このした蔭よ」の「よ」は、感嘆の響きがあり、喜びの気味を表わし、体を休めるには格好の有難い木の下蔭であることよの意である。しかも「藤若葉」の働きは重要で、目にも優しく映り、誠に気分爽快というところであろう。前句を余すところなく受けて付けた手法は、さすがに見事である。

究竟のこのした陰よ藤若葉

初ウ二 魚荷の蛸を所望して見る

葎

雑。魚荷とは、行商の荷ではなく都市部などへ輸送する魚の荷物と解したい。前句を魚荷を運ぶ人が街道筋の藤若葉の木陰で休憩する体と見定めた付けである。「所望して見る」とは、普通は売らぬ運搬する魚荷であることを意味し、敢えてそれを所望して見たと趣向したのである。「所望」とは、些か大袈裟な少し畏まった気味が

感じられ、所望する人の様子が窺われて面白い。所望したのは村人であろう。魚荷の中でも蜻は異様なもの、即ち村人にとって殆ど見たことがなく、珍しかったのであり、何とも不思議なものを見たという村人のその場の様子が思われて楽しい。魚の行商人と解したのでは、働きの乏しい句になつてしまふ。

魚荷の蜻を所望して見る

初ウ三 逗留ものらりくらりの惟然坊 護

雑。「逗留も」の「も」は、逗留するにつけてもの意であろう。

惟然は、芭蕉の門人で、師の菩提を弔うために風羅念仏を考案し、その念仏を唱えて諸国を行脚した風変わりな僧として知られる。『近世畸人伝』(寛政二年)や惟然法師追善集『風羅念仏』(寛政十年)に、彼の逸話や風羅念仏を踊る彼の姿を描いた挿絵が見え、『俳家奇人談』(文化十三年)にもその奇行が紹介されている。そうした惟然の風貌、気風な人柄を付けた付句である。逗留するにつけてもこれという目的があるわけではなく、只ぶらぶらと日を過ごし、退屈凌ぎに魚の行商人を呼び止めては蜻を所望する僧侶姿の生臭坊主、それは惟然坊であつたと言うのである。「ものらりくらり」とは、惟然の気風な変わった行動の様子を窺わせる。今度は「魚荷」を行商の荷と考えて良いであろう。

逗留ものらりくらりの惟然坊

初ウ四 よい葬礼に大津八町

村

雑。「よい葬礼」は、立派な葬礼の意であり、よき僧、よき人など蕪村好みの表現である。大津は宿場で、その地名に「会つた」出

会つた」の意を掛けている。『諸国案内旅雀』に「大つはたごや町を八町と云。「八町」は、宿場町の広さ、旅籠宿の町筋の距離であり、繁華な町の様子をも窺わせる。乞食坊主惟然坊が、大津の宿にのりりくらりと逗留していたところ立派な葬儀に巡り合つて雇われ、稼ぎに預かつたというのである。単に出会つたというのでは、俳諧的面白さに欠ける。よい葬儀には多くの坊主が雇われ、僧侶の数はその葬儀の立派さを示すものである。風変わりな惟然坊も僧侶として数のうち、幸いにも雇われることになつたという趣向である。「大津八町」という表現効果は、頗る大きく、巧みである。

よい葬礼に大津八町

初ウ五 冬空の七ツも聞ず夕ぐれて 葦

季語は、「冬空」で冬である。七ツは午後四時、「聞かず」は時を告げる鐘の音も聞かないうちにの意である。冬の日は短く、慌ただしく暮れる。葬儀は、午後二時から三時頃に掛けて行なわれるのが通例だが、よい葬礼であるため行列が長く続き、冬空の下その列は大津八町に及び、葬儀が終わらないうちに、まだ七ツの鐘も聞かないのに夕暮れになってしまつたというのである。前句の町並の八町を、葬儀の列の長さに取り成した付けである。相当なお大尽の野辺の送りの行列と見え、しかもさすがに都に近い土地柄、豊かな宿場町に相應しい葬礼であるというのであろう。

冬空の七ツも聞ず夕ぐれて

初ウ六 なれ衣濯ぐ波のうねく

護

雑。「なれ衣」は、馴衣、着馴れた衣、毎日着ている着物のこと

である。「結びの角力はやう果たり 月居 なれ衣縫はす一夜妻  
我則〔几董句稿〕などの例がある。「うねく」は、衣を濯ぐ  
ことよつて川浪が立ち広がる様子を描写した言葉である。前句の  
冬のわびしさを、生活のわびしさに転じる。一日働いて汚した一枚  
限りの着物を、明日のために夕方には脱いで洗うという着のみの着  
のままの生活で、冬空の夕暮れのわびしさを感ずる余裕さえない貧し  
い生活である。衣を洗う人は、独り暮らしの男性であろう。「早く  
も夕暮れとなつた前句の気分、忙しく立ち働く女の様が照応して  
いる。」(座の文芸蕪村連句)という解があるが、それでは「なれ衣」  
が着慣れた衣という意味のみの説明に終り、付け句の言葉として働  
きがない。夕暮れ時分慌ただしく洗濯するのは、着慣れた一枚切り  
の貧なる生活故と解すべきであろう。

なれ衣濯ぐ波のうねく

初ウ七 恋ぐさの何をたねにや云よらん 村

雑。恋ぐさで、恋の句である。「恋草」は「御傘」に「非植物、  
只恋の事也。」とある。前句の洗濯をする人は女性。「なれ衣」は  
いつも着慣れていた衣、即ち普段着のことである。前句を女が今日い  
つもの着慣れた衣を洗濯していると解し、日頃から男は、その着物  
姿の女を見るにつけ恋の想いを募らせていたと趣向しての付けであ  
る。今その衣を洗濯している女を見た男が、何を恋の種にして、即  
ち何を切掛けに女に言い寄つてやるうかと思いを巡らしている体で  
ある。前句の「波のうねく」、付け句の「何をたねにや」という表  
現は、謡曲『草子洗小町』の「時かなくに何を種とて浮草の、波の

うねうね生ひ茂るらん。」による。また、久米の仙人が洗濯をする女  
の脛を見て神通力を失つたと云う『今昔物語』などの話が、句の発  
想の背景にあつたかもしれない。なお「此ほとり」に、「いにしへ  
も今もかはらぬ恋種や 樗良 何物語を秘めて見せざる 蕪村」と  
いう付け合が見える。

恋ぐさの何をたねにや云よらん

初ウ八 ともし火消へて春の夜の月 董

季語は春の月。月の出所。前句に男が女に恋の気持ち打ち明け  
ようとす場面を想い、夜もやや更け、油が切れて灯火が消えた部  
屋の中に、春の夜の淡い月の光が差し込んでいる様子を付ける。「春  
の夜の月」と言う艶なる風情が、前句の「云よらん」に照応する。  
夜が次第に更けて灯火は消え、艶冶な思いが募る春の夜、男と女が  
いる部屋の中を月明りがほのかに映して、恋の雰囲気がいよいよ高  
まり、その機会が到来した。男は恋の思いを成就さすべく、何をきつ  
かけに女に言い寄ろうかと思ひ惑う体である。天明調と言うべきで  
あろう。

ともし火消へて春の夜の月

初ウ九 憎まる、鳥も花の森へゆく 護

季語は、「花の森」で春である。十一句目の花の上座の花を引上  
げる。花の森は、桜の花が満開になり、森のようになっていところ  
ろ。前句のともし火消えてから時刻を夜明方に移し、夜明の鳥と発  
想したところに働きがある。夜明方となり、油が尽きて灯火が消え、  
春の夜の月が未だ西の空に残っている早朝から、誰も彼もが今を盛

りと咲く桜を楽しもうと花の森へ向かうのだが、人に憎まれる鳥までもが花の森へ行くことだの意であろう。鳥を擬人化し、花の森は風雅を解することができないと思われる鳥をも誘う美しさであるという作意である。「鳥も」の「も」は、あの憎まれものの鳥までもがの意である。時刻を春の夜の夕暮れとして、花の森で眠ろうとすると解したのでは、詰まらぬ句になつてしまふ。

憎まる、鳥も花の森へゆく

初ウ十 独活の苦みも大原三唸

村

季語は、「独活」で春である。地名大原に苦味の多い大原の独活と言ひ掛ける。「大原三吟」は、文明十四年、宗祇・宗長・基佐らが大原で巻いた連歌で、連歌の代表作と評され、広く単に連歌を意味する言葉として用いられることがあつた。また、大原は桜の名所でもある。この季節人々は大原の花の森に誘われるように出かけ、人に憎まれる鳥までもが浮かれて花の森を目指す。その花の下で人々は連歌を催した後、宴席を設けて苦味の多い大原の独活料理を楽しむ。野趣豊かな独活の苦味も味わい深いもので、大原における楽しみの一つであり、独活の苦味もまた色々な味を備えた複雑な連歌の味に通うと言ふのであろう。「憎まる、鳥も」に対して「独活の苦みも」と応じる。『此ほとり一夜四歌仙』所収の歌仙「花ながら」の巻に、「摺鉢の独活のあへ物召されけり 蕪村 既満ぬる連歌一折 几童」の付け合が見られ、連歌会後の宴席の折、季節の料理として独活の味覚を楽しむことがあつたのであろう。

独活の苦みも大原三唸

初ウ十一 用の有時は童ワラガの見えぬ也 童

雑。「童」は、連歌の宗匠が連れる童であろう。子供は、独活の苦味を味わうことなどとても出来ず、むしろ嫌うものであり、また連歌の意味深長な味などは、到底分からぬものである。童は連歌に興味がなく理解もできず、面白くないから外に遊びに出てしまつたのである。連歌の催しも終り、用事を言いつけようとして童を呼んだが、その辺りには居らず、遊びに出ていつてしまつて戻つてこない。用のある時に限つて子供は居ぬものだとの意であろう。「独活の苦味も大きい大原」と言う日常語的表記に、発話休にて応じた転換の付合の妙は、巧みである。

用の有時は童の見えぬ也

初ウ十二 疱瘡神の小言はじまる

護

雑。疱瘡神とは、子供が口うるさい大人に対して付けた悪口的な渾名であろう。疱瘡は、天然痘とも言い、疱瘡神という疫病神によつて発病すると信じられ、子供にとつて非常に恐ろしい病気であつた。前句を子供を咎めて大人が言う小言と見定め、小言を言われた子供が、「大人の小言がまた始まつた」と言い返した発話休の句である。「用事を言い付けようとする時、いつもどこかに行つてしまひ、直に役に立つたためしがない」と小言を言う大人の口うるささを、「疱瘡神めが」と子供が不平そうに言うのである。

疱瘡神の小言はじまる

名オ一 土佐駒に光輝く鞍鏡

村

雑。土佐駒について『本草綱目訳説』に「土佐ゴマト云アリ、小二

シテ達者ナリ、土州ニ出、ヨクソダツ。」とある。余り見映えのしない小型の馬である。痲瘡神の神送りの神事の場面を趣向しての付けであろう。痲瘡神に扮した人が、土佐駒に付けた鞍鎧の汚れに気がついてそれを難じたため、世話をする人が急いで磨き上げ、今はすっかり奇麗になつて光り輝いているの意であろう。付句を人形と見ることも出来るが、むしろ地方の人々による土俗的な行事と見て、痲瘡神に人が扮しているとした方が俳諧として面白い。

土佐駒に光輝く鞍鎧

名オ二 五日の風のわたる葉ざくら

董

季語は、「葉ざくら」で夏である。『論語』に「五日一風、十日一雨」とあり、「五風十雨」とも云われる。前句を土佐駒に乗つて好天統きの道を行く旅の体と見定めての付けであろう。鞍鎧の金具が日の光を受けて光り輝くほどの絶好の日和で、折から葉桜を渡つて来る風は誠に爽やかだの意である。「光り輝き」に爽やかな季節を思い、「葉ざくら」と応じ、旅行く人の爽快な気分が句作趣向の眼目であろう。この付合いを単なる叙景と解したのでは、働きのない句に終つてしまふ。

五日の風のわたる葉ざくら

名オ三 かはらけの干間うつくし狭筵に

護

雑。かわらけは素焼きの焼き物のことである。「干間」の「間」は、時間のこと。好天統きを利用して風の通う葉桜のもと、筵を広げ、素焼きの陶器が並べて干してある。その眺めは、誠に爽やかである。「狭筵」は、俗語の「かわらけ」に対して雅なる響きの言葉であり、

普段は余り気にも止めないかわらけの土色が、日の光を受けて美しく見えるのある。花のない葉桜の季節に、素朴なかわらけを美しく捉えたところが手柄であろう。

かはらけの干間うつくし狭筵に

名オ四 書記も典司も放参の体

村

雑。書記は、禅寺の役僧で、文書製作、典司は、同じく仏堂の清掃や灯燭などの任に当たる。放参は、参禅などの仏事を休むこと。句は、禅寺の閑暇な体である。今日は参禅の行法がなかつたらしく、禅寺の僧侶の誰も彼もがのんびりと寛き、寺の裏庭に筵を引いてかわらけが十し並べてあり、その辺りが今日は美しく見えることだ。「間」を場所に取り成している。かわらけを干す事は禅寺において特別なことではなく、日常の仕事で、禅寺の自給自足の生活の一端である。自分たちの食器までも、放参の折などに作り準備するのであろう。酒の席と言う解釈も可能かと思われるが、いかがであらうか。蕪村流の漢語趣味が窺われる。蕪村に「書記典司故園に遊ぶ冬至哉（自筆句稿）」という句がある。

書記も典司も放参の体

名オ五 狸とはしりつ、も又碁を囲

董

雑。放参の体の暇潰しに、碁を楽しむのである。「知りつつもまた」とは、以前からそれと知りつつもの意であり、狸の正体を見抜いていたのである。が、狸であろうが誰であろうがそんな事は、一向に気にしないのである。付け句は、そうした禅僧としての性格を捉えて巧みである。禅僧たちは相手を選ばず、碁もまた単なる遊びでは



なく、無言の行にも通う「無言の会話」として彼等に好まれたのである。蕪村一派の人々はお伽噺的動物物語の創作を屢々試みており、外に「矢を負し男鹿来て伏す霞む夜に 樗良 春もおくある月の山寺 蕪村」〔此ほとり『薄見つ』の巻〕という動物往生譚とも言うべき付合も知られる。此のような傾向は、彼等の俳諧の特徴と言つてよいであろう。

狸とはしりつ、も又碁を囲

名才六 身は人質のとしも去ヌめり

護

雑。下七文字「としも去ヌめり」は、「契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋は去ぬめり」〔千載集〕の和歌的表現を借り、捕らわれて人質となり、久しいことだという感慨を表わす。狸ばかりが通つてくるような辺鄙な所に、人質として捕らわれの身のまま今年もまた過ぎ行くことだ。そうした境遇では、碁の相手を選ぶのに我が假な事を言つてはおれず、例えそれが狸であってもである。狸とは久しい付き合ひ、馴染なのである。禪僧の性格を人質の境遇に取り成し、歴史物語的世界を趣向した付けである。

身は人質のとしも去ヌめり

名才七 一奏わすれぬ我を憐て

村

雑。奏でるは、詩歌管弦を奏でる意で、その人は女性であろう。前句から、今なお人質の身のまま年を過ごすことになった女性が、我が身の悲運な境遇を嘆ずる様を趣向する。「人質」一奏「一奏」からは身分の高い、管弦にも優れた女性が思われる。今は人質の身で、恐らく自分を捕らえた人物に呼び出され、その人の前で言われるままに

一奏でをしたのであろう。しかし、一奏でをすると今なお人質となつた昔の日のことが、昨日のように蘇つて来て涙が溢れる。あの折りもこうして奏でたのだが、そのことに困つて人質となつてしまった。そうした我身を思うにつけ、憐れみの情が頻りに湧上つてきてつい涙してしまふのである。恐らく王昭君の話に発想を得て創作した付け句であらう。蕪村が得意とした句作手法の一つである。

一奏わすれぬ我を憐て

名才八 恋歌と見ゆる蓋の裏

葦

雑。恋。嘗て宮中に仕えたことのある女性が、久し振りに帝に召され、一奏奏上したのである。すると蓋を賜り、その蓋の裏には昔私への恋の情を詠んだ歌が記されてあつた。さてさて帝はどのような思し召しであつたのかと、昔私に思いを寄せて下さつた帝の恋に氣付き、我が身の過ぎし日を思い憐れむのである。今も変わらず帝が心を懸けて下さつているのかと思うと、一層憐れさが増すばかりである。蕪村一派が好んだ王朝恋物語だが、前の世界からそれほど大きな変化は見られない。

恋歌と見ゆる蓋の裏

名才九 ゆく水に月洩れとてや竹床几

護

季語は、「月」で秋である。十一句目の定座の月を引上げる。「恋歌」竹床几「からは洒落た人々が想起され、鴨の河原で月を楽しもうとする人々の夕景であらう。歌舞伎役者、芸子などが竹床几に腰を下ろし、床几の下を流れる水に映る月を楽しみながら酒を酌み交わす体である。酒宴酣となり、芸子から蓋を受けた男が、蓋の裏に

書かれた恋歌らしき歌に気付き、これこそ酌を勧める芸子からの自分への恋の証と興じたのである。月見の酒を樂しむ席で、蓋の裏に記された散らし書きを座興に取り成した付けである。

ゆく水に月洩れとてや竹床几

名才十 貧乏村に鹿を追ふ声

村

季語は、「鹿」で秋である。美しい月影映る川を山村の谷川へ、賑やかな世界から侘しい世界へ移した付けである。狭い僅かな土地を耕して生活する山間の貧乏な村であり、もとより収穫は少なく、その僅かな農作物も鹿に荒らされるのである。その鹿を追い払う村人の声が、夕闇の中に聞こえて来る。この地に庵を結び住んで風雅を樂しむ人が、月の美しい夜谷川の辺りに粗末な竹造りの床几を置いて腰を下ろし、流れに映る月を眺め楽しんでいと、鹿番の音が遠く聞こえ、秋の夜の風情が一層募ることだの意であろう。付句としては、場面を刷新し、当時の文人好みの景を描いてそれなりの働きがあるが、句作においてそれほど趣向の巧みはない。

貧乏村に鹿を追ふ声

名才十一 肌寒う和尚の疝氣揉で居る

莖

季語は、「肌寒」で秋である。寒村の人里離れたお寺の住職が、秋も深まって肌寒くなってきた頃疝氣を起こし、小僧が和尚の疝氣を介抱している。その折村里の遠くの方から村人の鹿を追う声が聞こえてきた。寺も決して豊かではなく、貧寒とした雰囲気にもまれた檀家の少ない小さなお寺であろう。和尚も老僧で、小僧と二人暮らしと思われる。村人の暮しは貧しく、寺の生活もまた貧しく侘しい

のである。和尚を一人暮らしと見え、和尚自身が揉むという別解もあるが如何であろうか。

肌寒う和尚の疝氣揉で居る

名才十二 けふは街が二人まで来た

護

雑。小僧が和尚を介抱しながら、和尚に話しをして居る会話の言葉を付ける。いわゆる発話体の句である。夜分、小僧は和尚を介抱しながら、今日一日の出来事を話し聞かせるのである。街が一日のうち二人も来たことが、極めて珍しい話題で、珍事とも言うべき話の種であった。普段は人の訪れることが減少しない寂れた寺なのである。それが今口に限ってどうしたことか街が、二人までも来たというのである。会話体の句は蕉門俳諧に少なく、談林俳諧に比較的多く見られ、蕪村たちもしばしばこの手法を試みている。

けふは街が二人まで来た

名ウ一 長屋中昼飯時と成にけり

村

雑。長屋は、武士長屋ではなく、職人や日銭を稼いで生計を立てているその日暮しの人々の住む貧乏長屋といったところであろう。「長屋中」の「中」とは、あちでもこつとでもの意である。貧乏長屋では商売にならず、普段は商人の出入りも少なく、もとより街などは来ないものだが、どうしたことか今日は珍しくかも昼飯前から街が二人までも長屋にやって来たのである。そのことが昼飯時になつて長屋中の人々の大変な話題になり、あちらでもこちらでもその話で持ちきりである。夜を昼に、寺を長屋に、二人の人物を大勢に定め、貧乏長屋の珍しい話題にした趣向が面白い。

長屋中昼飯時と成にけり

名り二 降そ、くれて仕舞八專

董

雜。「降りそ、くれて」は、降りかねての意である。「仕舞」はシマフと読み、時間が過ぎて仕舞ったの意。「八專」は、八專日和のことで、壬子（ミズノエネ）から癸亥（ミズノトイ）の日までの十二日間のうち間日の四日を除いた八日を言い、その日は雨が多く、年に六回ある。何分八專の頃なので、空は朝から今にも降り出しそうな気配であり、長屋の人たちは、働きに出ようかと天気を気にしながら迷っているうちに、昼になってしまった。前句に、働きに出ないまま昼まで時を過ごして仕舞った人物を見定めての付けである。

降そ、くれて仕舞八專

名り三 綻びも男の縫ふた旅ごろも

護

雜。男が旅の宿で、天候を気にしながら旅立ちの機会を窺いつつ、綻びを繕っているうちに夕刻になって仕舞った体である。「男の縫ふた」は、所詮どうせ男の繕い物、不器用な手付きで旅衣の綻びの繕いも思うように進まないという男の所作を窺わせる。旅衣の繕いの縫い目が、乱れていて不揃いでいかにも男の手によることが分かるのである。八專の頃で今にも降り出しそうな気配の空模様を気にしながら衣の繕い仕事をしているうちに、一日中家に閉じ込められ、日を無駄にしてしまったというのである。

綻びも男の縫ふた旅ごろも

名り四 今に懇意を捨ぬ大音

村

雜。恐らく以前旅の途中で懇意になったのであろう、それ以来付き

合いをしている人の体である。前句を長旅の途中旅衣の繕いをする人と見る。遙か遠くから千里も遠しとせず、旅の途中で衣の綻びを繕いながら、友が久し振りに訪ねてきてくれたのである。門口から「居りますかいな」と大声で案内を乞う聞き覚えのある声がし、出て見ると旅の途中破れを繕ったと思われる衣を纏った友が立っている。今を忘れぬ友の心が嬉しい。蕪村は、前句の「男の縫ふた」という表現に、単に手慣れないたどたどしい縫い後が見られるということのみでなく、その男の心情を見定め、旅の苦勞を厭わず訪ねてくれる友を趣向し、付句を試みたのである。「朋有り遠方より来たる、亦楽しからず乎。」（論語、学而篇）による趣向であらう。

今に懇意を捨ぬ大音

名ウ五 花二代またく色香のおとろへず

馬南

季語は「花」で春、花の定座である。「またく」とは全くの意。一句は、二代にわたり色香衰えず、立派に花を咲かせているの意で、前句は、花見を催して迎えた客への亭主の言葉、付句は招待された客の挨拶という趣向であらう。が、本連句は、几董の父几圭十三回忌追善の俳諧であり、馬南の付句には几董への挨拶、及び几圭に対する追悼の意が込められていると考えたい。作者馬南は、大魯の初号で、蕪村に高く評価された俳人であり、当然几董とも親交があった。従って几董が訪ねてきた馬南に「今に懇意を捨ぬ大音」と挨拶をし、その返礼として答えるという形式の付合である。「今もって懇意を忘れずに父の悔やみに気安くお訪ね下さり有難いことです。」との挨拶に、「父君は優れた作品を残されましたが、あなた様も父

君に劣らず立派な作品をお詠みで、二代に互る俳諧のご活躍、誠に素晴らしいことで御座居ます。」と返礼の体である。

花二代またく色香のおとろへず

挙句 すぐな流にみつ葉川菑

執筆

季語は、「みつ葉・川菑」で春である。「すぐな流」は、凡圭・凡菫と滞ることなく代々続いて繁栄するその家系を象徴する。初代の見事な花を咲かせた桜の木に続き、二代目も色香が衰えず好天に恵まれて立派な花を見せ、その桜の辺りの真直な川の流れには三つ葉や川ちさが生え、禮い春うららの日和である。三つ葉には三代の意を込め、すんなりと二代続き、更に三代と続いて行く凡菫家の彌栄を祈念して三つ葉、四つ葉と祝い述べる祝儀の挙句である。

【付言】十数年以前、木村三四吾・大橋正叔両先生の蕪村連句輪講の席に同席させて頂き、種々ご教示を頂く機会に恵まれた。本稿は、その折のご教示に基づき、私見を加えて纏めたものである。両先生に衷心よりお礼を申し上げます。

